

第52期（2005年4月期）日本語研修コース

鹿 島 央

2005年度4月から日本語教育プログラム全体の大幅な見直しを実施に移されたことに伴い、日本語研修コースもクラス数の削減を行い、運営にあたった。

日本語研修コースでの今回からの大きな変更点は、各留学生のニーズ、すなわち研究との時間配分を考え、1週間の日本語学習にどの程度の時間を費やすかを留学生自身が選択できる余地ができたことである。しかしながら、初級で来日した留学生のほとんどは、日本語研修コースを受講している。

センター内での各日本語コースの名称が変更されたことにより、日本語研修コースも、EJ (Special program for Elementary Japanese) コースともよぶようになったが、学習期間にあわせた6ヶ月コースという名称も使われている。

1. 研修生

A. 大使館推薦（研究留学生）

文部科学省より配置された大使館推薦の国費研究留学生は、22ヶ国29名で、進学先は名古屋大学25名、滋賀大学、愛知工業大学、名古屋市立大学、中部大学がそれぞれ1名であった。今回、29名のうち11名は全学向けの日本語講座を受講した。内訳は、IJ111（全学集中日本語初級前半）2名、IJ112（全学集中日本語初級後半）4名、IJ211（全学集中日本語中級前半）2名、IJ212（全学集中日本語中級後半）2名、SJ202（全学標準日本語中級後半）1名であった。

B. 学内公募（大学推薦国費留学生）

学内で研究をする様々な留学生にとっては、今年度からの日本語プログラムの拡充により選択できる日本語コースが増えたために、日本語研修コースへの応募は大学推薦の国費留学生だけに限定した。このことは前年度2月に開催されたセンター協議会でも報告し、全学的にも周知をした。

全学への公募の結果、今回は応募はなかった。

以上のように、第52期は研究留学生29名、うち18名

が日本語研修コース、残り11名は全学向け日本語講座を受講した。

2. クラス編成

授業は、当初2クラス編成とし、専任教員1名、非常勤講師8名の計9名が担当した。前年度までは5クラス編成であり、留学生のレベルにも細かく対応できていたが、今期の18名の未習者の中には、全くの初級ではなく多少の学習を行っているものもあり、2クラスの編成では進捗にかなりのばらつきが生じ、週15コマという集中度の高いコースの特殊性もあり、対応が難しい面が出てきた。そこで、急遽この事態に対応するために、午後の1コマについては、クラス数を3クラスとし、会話などの運用能力を高めるための授業にあてた。

3. 時間割と日程

授業は月曜日から金曜日まで、午前8時45分から午後2時30分まで90分授業を3コマ行った。これまで火曜日を除く毎日午後4時15分まで行っていた個人的な質問、会話練習などによる個別に問題を抱える学習者への対応はすべて実施できない状況となった。

コースの日程は以下の通りである。

4月12日(火) 開講式、4月13日(水) 授業開始、夏季休業7月25日～8月31日、9月1日(木) 授業再開、9月13日(火) 修了式。夏季休業中、希望者は全学向け夏季集中日本語講座（7月25日～8月9日）を受講した。

4. カリキュラム

カリキュラムは、これまでのように(1)主教材 *A Course in Modern Japanese [Revised Edition]*, Vols. 1&2 (名古屋大学日本語教育研究グループ編) を中心とする授業、(2)その他の活動（ホームビジット、自分に関連する事柄について話す、書く活動など）

(3)専門について話す, の3つで構成した。以下に, 概要について報告する。

(1) 教科書を中心とする授業 (1~14週)

夏休み前に主教材である *A Course in Modern Japanese, Vols. 1&2* が終了するようなカリキュラムを編成した点は, これまでと同じである。

- ・ドリル (各課の文法練習)
- ・ Dialogue (会話)
各課のはじめに発音練習を行った。

・ Discourse Practice & Activity

会話の運用練習として各課の Discourse Practice にもとづいて口頭練習を行った。

- ・ Aural Comprehension
- ・ Reading Comprehension

(2) その他の活動

・ 話す練習

まとまりのある話をする練習として, 先期と同じテーマ (「たのしかったこと」「趣味について」「国の観光地」「国との違いについて」) について原稿を書いてから話す活動を行った。また, 日本人ゲストにインタビューする活動も2度行った。

・ 書く練習

話す練習での原稿作成を書く練習として行なった。

・ Pronunciation Practice

日本語の発音システムを7回にわたり導入する「SoundSystem」というクラスと, 会話の時間に行う「Sound Practice」という発音練習の時間を設定した。

・ ホームビジットプログラム

ホームビジットプログラムも例年のように第13週目の土, 日に実施した。教科書の80%程度が終了

した時点での訪問であり, 実際に日本語がどの程度使えるのかを実地に体験するいい機会になっている。同時に日本人の日常を知る貴重な経験にもなり, 学生にはおおむね好評な活動である。訪問の前には, 教室活動として電話のシミュレーションや実際に訪問する家庭に電話することも行っている。訪問した翌週にはクラスで体験をレポートし, その後訪問家庭へのお礼状も学生自身が書いている。

(3) 「専門について話す」(第15週)

個別指導を行った後, 各留学生の専門領域について発表した。発表は207講義室で行った。

5. まとめと問題点

今年度から日本語研修コースも, 全学日本語プログラムの拡充・改善に伴いクラス数を2クラスとし運営にあたった。しかしながら, これまでの5クラス体制では対応ができていた留学生, すなわち全くの未習者ではないが, 初級前半終了程度の留学生には全学の日本語プログラムに参加してもらわざるを得ない状況となった。国費研究留学生の来日当初の日本語力は, これまでも時期により様々であったが, 初級前半から中半にかけての留学生も多くなり, 本来ならば日本語研修コースでの研修を通して, 日本語力のレベルアップが期待される留学生も, 研修コース2クラス体制では対応できないことが分かった。さらに上述したように全くの未習者の中にも多少の既習者がいる場合, 長期的な集中度の高いコースでは, 習得度に時間の経過とともに明らかな差が生じ, きめの細かい対応が難しくなることもクラス数が少ないことにより経験できた。